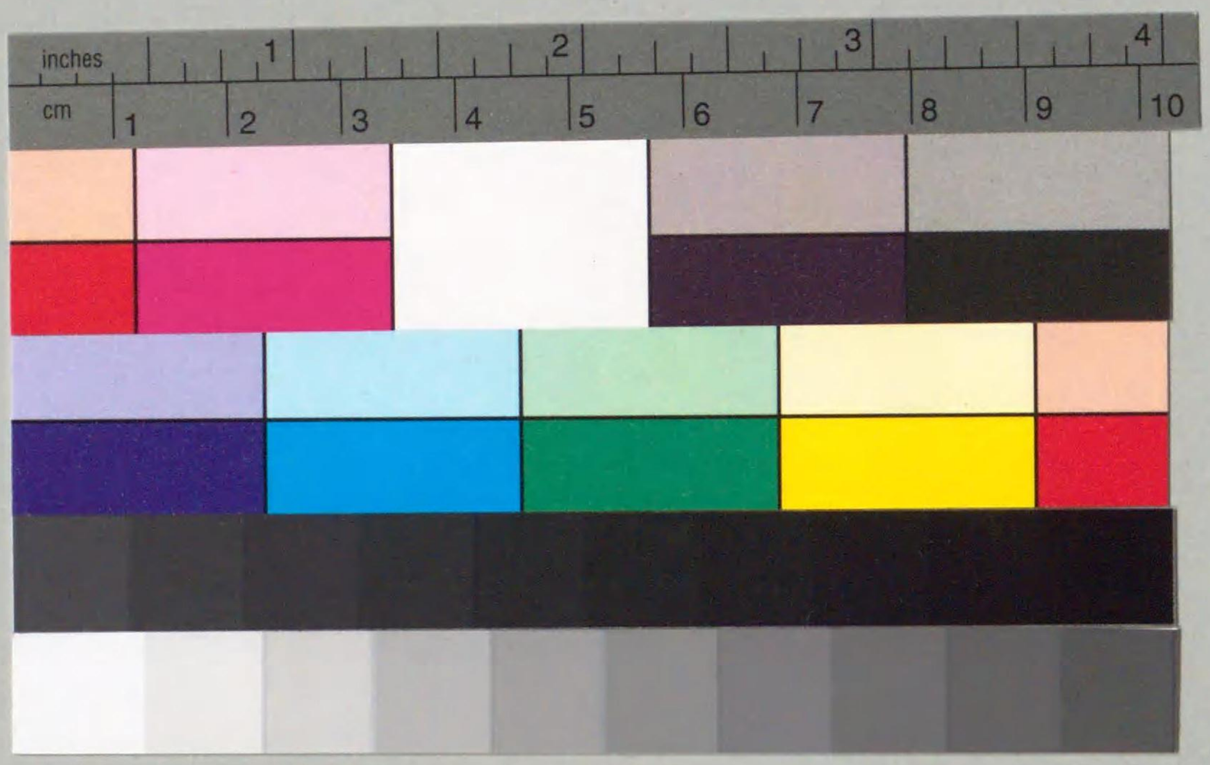

inches
1
2
3
4
cm
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

小曲集

夢の石寶

東京

交蘭社

小序

黑いびらうどの小函の中に、紅い寶石が夢を見てゐる美しさを、私はそつと忍び足で近よつてのぞき込んでみたいやうに思ふ。

ここに集めた詩篇は、多くはさうした望みから少女の夢をうかゞつたものである。けれど私の貧しい力は、それらの夢

國立國會
13.4.27
圖書館藏書
01W20981
12003004680 12

寶石の夢　目次

寶石の夢……一
影　芝、居……三
螢……五
秋……七
白い手の人……一〇
こほろぎ……一三
月見草……一六

をあまりに貧しくしはしなかつたかと恐れてゐる。

ともあれ、これを繙いて下さる方々の心に、ここにある詩篇が少しでも生きることが出來れば幸甚である。

終りに、この集を出すにあたつて、西條八十氏のいろ〳〵なお力添へを深く感謝してゐることを記しておきたい。

大九年十一月

著　者

潮……一九
白日の夢……二一
消えゆくもの……二四
夢……二六
蘆の唄……二八
幻想……三二
時雨……三五
若き日のふたり……三七
指輪……四〇

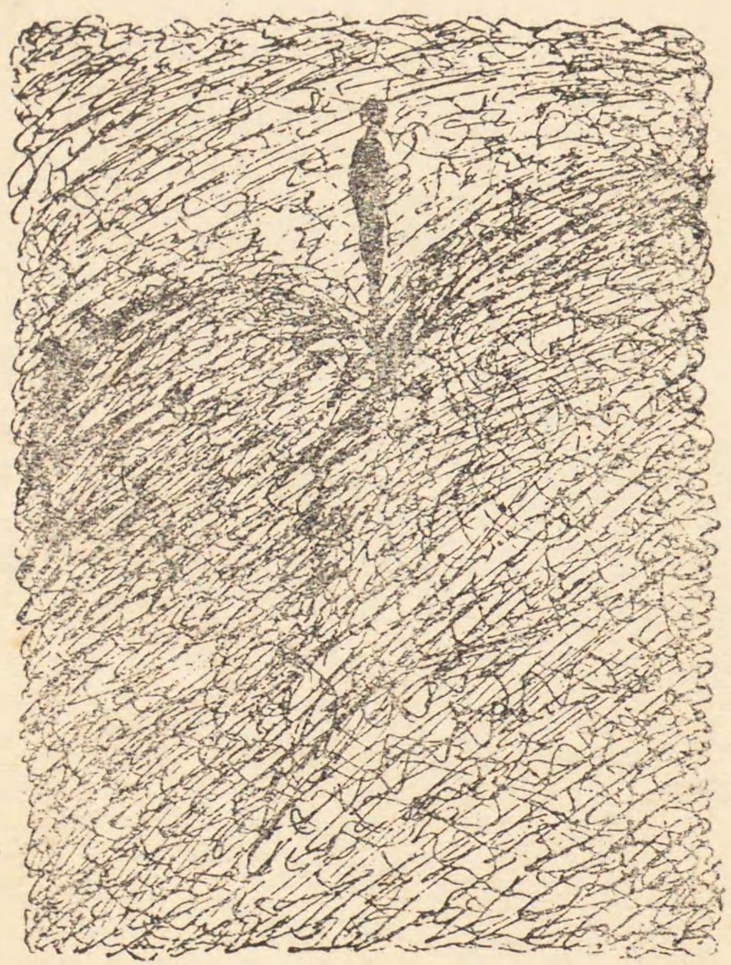
涙の壺……四三
月……四五
小指……四七
白い蛾……五二
露よ露……五四
ほのの憂ひ……五六
銀の絃……五九
睫毛……六二
きりぎす……六三

悲しみの雨……六六
獵　人……七〇
カナリヤ……七三
ほほゑみ……七七
落　日……七九
花の散る日……八一
お花畠……八三
蔥坊主……八五
異人さん……八八

流れ星……八六
ものの影……九二
宵　玉……九六
白い鳩……九八
舞踏靴……一〇〇
悲しみ……一〇一
とつた歳……一〇三
友を思ふて……一〇五
梅の蕾……一〇六

歌時計……一〇八
抜け毛……一一〇
とんころりん……一一一
魔術者……一一三
春……一一五
夜霧……一一六
春の手品……一一八
唖の小鳥……一二一
赤い林檎……一二二

初夏……一二四
秋の夕……一二六
心……一二八
眼と手と胸……一二五
覗き眼鏡……一二三
三つの心……一三五
思ひ出の絲……一四〇
心のコップ……一五〇
私は知らない……一五九



開かずの窓（詩劇）……一六九

寶石の夢

影芝居

私の心にくりかへす
秋のゆうべの影芝居

泣いて別れたあの人も
憎くて別れたあの人も

喧嘩で別れたあの人も
昔のまゝにひつそりと
足音もなく忍び來て

私の心にくりかへす
秋のゆうべの影芝居

螢

「夕べともなれば
われ螢となりて
君が頸にとまり
ちらりほらりと
愁ひをとぼさむ」

あまりつれなき君ゆゑに
よしなきことも思ひみぬ。

秋

もの思ふ子に
秋ふかし
祈り捧ぐる
雨の手の
あはれ

いたくも痛せしかな。

今宵は
月も痛せぼそり
小さく
遠く
かゝれるを

淋しと見たる我なりき。

白い手の人

春の灯は
君の白い手で
ともされて
私の悩ましい影を
くらい胸から

吸つてくれる。

春の鐘は
君の白い手で
鳴らされて
私の悲しい涙を
おもい瞼から

拂つてくれる

おゝ！　その君
白い手の靜かな人！
その人を
私に知らない！

こほろぎ

あきかぜ
忍びよる
くさむら
忘られし

鎌ひとつ
白く光る

あきかぜ
忍びよる
くさむら

こほろぎ
鎌に止り
唄は亂る。

月見草

月を慕うて
咲く花の
月が出ぬとの
ためいきが
まぢつて匂ふ

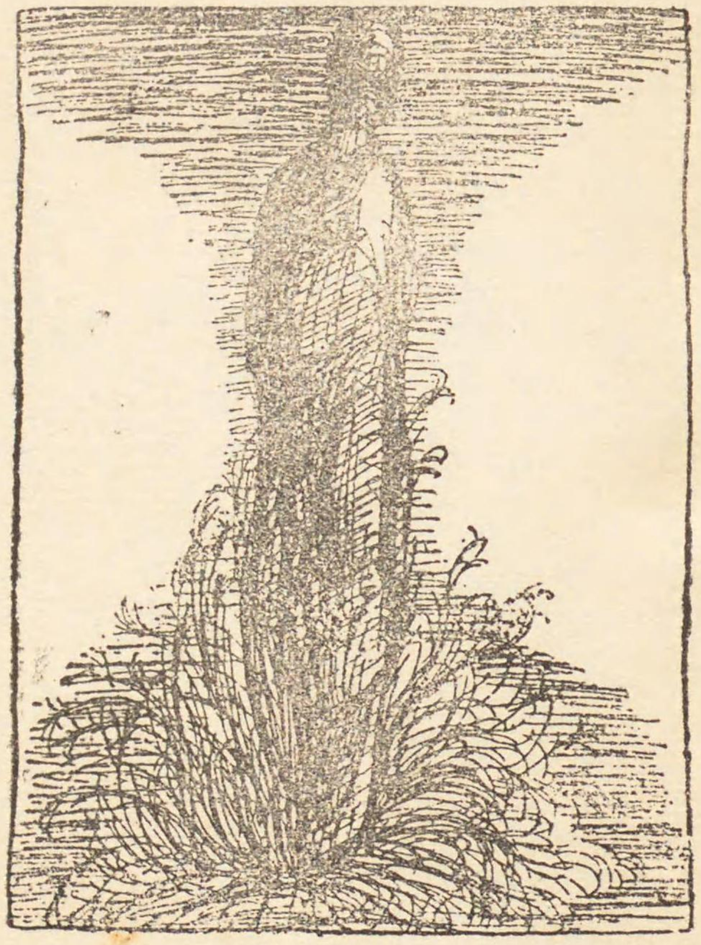
河原かぜ
たゞさわ〳〵と
月を呼ぶ。

花はゆら〳〵
河原の水に
夢をゑがいて

ゐる頃を
ひがしの山が
ほのめいて
ほゝゑみながら
月が出る

潮

淋しき胸をうつ波
泡立つしろい花を
散らせじと手にすくひ
そと香をかげば——
なつかしさあまりて



はかなきくちづけ
あゝ、今し赤き月は
かなたの沖に昇りぬ。

白日の夢

「どこかで見た花——
夢のなかに
ぽつかり咲いた花か
——
「どこかで見た人——

夢のなかに
いたましく泣いた人か」
春の日の
ほのかにあまき
うれはしさ
夢のさかひに

身をおいて
夢を夢見る
わがこゝろ。

消えゆくもの

野路のかなたのぱらそるの
赤と青との悲しみは
遠く消えゆく思ひ出の
いとしき影のここちして……

秋の野に來て物思ひ
野路のかなたのぱらそるの
消えゆく影を惜しむ身に
やさしくのぞく白い月

消えゆくものをひつそりと
送つて出づる白い月。

夢

ゆふべ、夢のなかで
あたしの胸に咲いた
白いさびしい花。
あたしはその花片が
泣いてゐるのを聽いた。

今朝、眼がさめてから
胸の上をさぐると
悲しい手紙があつた。

蘆の唄

君はよも
忘れ給はじ
幼なき日
うちつれて青き湖邊に
かの日うたひし蘆の唄。

「寂しや暮れゆく
水の面に
眠るよしなき
われは蘆の葉
蘆の葉、蘆の葉
すゝり泣くよ

たゞひとり」

あゝ！　君よ
幼なき日の友よ
いつの日も
かの日を思へ
いつの日も

かの唄を思へ
蘆のごと寂しき日は。

幻想

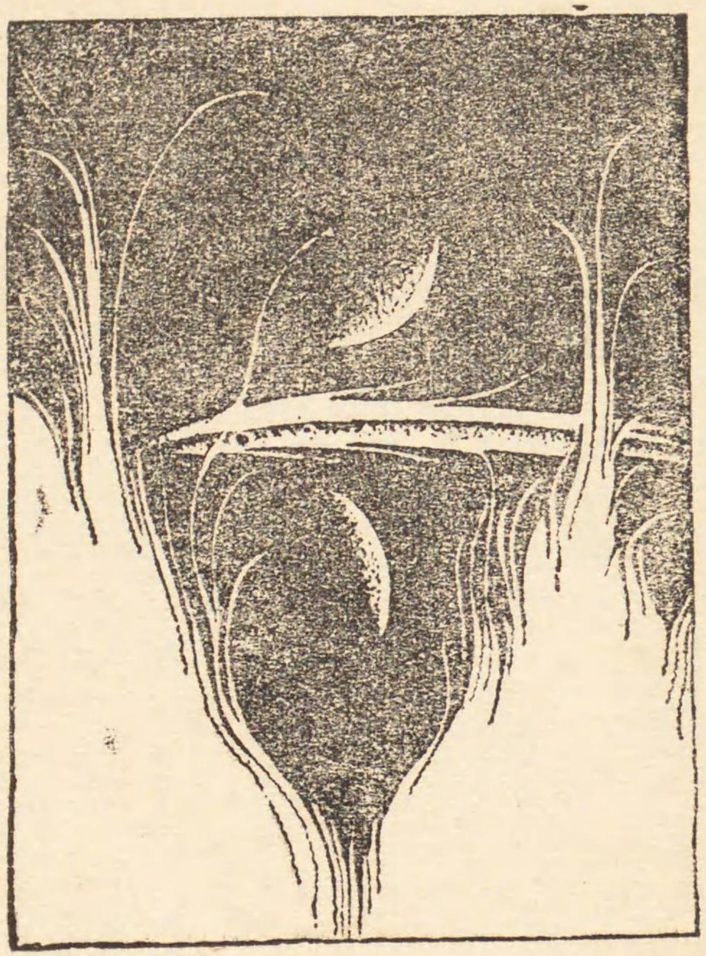
月けぶる
海のひかり
ほのかなる潮の香
帆をかたむけてさすらふ
船のひとつに

淋しさはつきまとふ。
わがこころの海も
やがて波立ちて
夢の船ひとつ浮ぶ
あゝわれに許せ
靜かに祈ることを！
うつゝの船と夢の船と

共々にやすらかなれと！

時雨

わびしさは
軒たゝく時雨
佛壇の灯は細く
胸のおもひは悲し
叩けども叩けども



うち澄む鐘の響は
時雨の音にまぎりて
父戀しさのいや募る。

若き日のふたり

いつの日か河のほとり
友とふたり
なみだしき
水の上の白き月。

いつの日か河のほとり
友とふたり
笑みて見ぬ
水の上の白き月。

夕べしづけき
水の上の白き月

ひそ〳〵と夢を流せば
若き心のさだまらぬ。

指輪

青い月夜に——
金の指輪をつと投げて
友はさゝやく。

「ふたりの運をあてませう。」

黑い闇夜に——
銀の指輪をつと投げて
友はさゝやく。

「もうお別れよ、泣いちやいや。」

かくてこの夢はさむれど
われら別れき
みとせのむかし。

涙の壺

月

赤き月いで
泣くはをとめ子

白き月いで
泣くはをとめ子

をとめ子は
いとしき涙の壺
ひそ〳〵と
月かげをうつす。

小指

あえかにも
わかき心は
かず〳〵の
指切りもして
あどけなき

約束ふかく秘めたれど

ほのかなる
憂ひを知りし
その日より
金の指輪の
やゝゆるく

痩せし小指の悲しけれ。

白い蛾

悲しい記憶を
あたらしく
すまいものをと
兄さんの
かたみの本は

しまつたが……
秋を一人の
さびしさは
とり出して見る
夕あかり
頁くるる手の

ふるうこと……

開けばかなし
白い蛾が
秋といふ字の
かたはらで
昔のまゝに

死んでゐた——

露よ露

明けやすき夜を
果しなきおもひ
くるほしく
亂れ〳〵て
朝は來りぬ。

起き出で〻見る
陽にきらめく露
わが淋しさを
さと吸ひ寄せて
今ぞ散り行く。

ほのの憂ひ

ひとり侘しく
灯をとぼし
ピアノに倚れどトレモロの
はかなき音は
胸にふる

秋の夜雨の忍び音か
古き匂ひの
歌の譜に
侘しく眼をばそゝげども
並ぶ音譜は
しつとりと

夜雨に濡るゝつばくろか

若き少女は

かゝる夜の

ほのの憂ひをいかにせむ。

銀の絃

銀の小絃の

泣いじやくり

指をつたうて

胸に入り

心の糸を

ふるはせて
悲しい歌を
うたはせる。

風よ吹け吹け
夏のかぜ
吹いて小絃の

泣いじやくり
そつとどつかへ
持つて行け
あまりに淋しい
宵なるを。

睫毛

をとめは寂しうら悲し
小さい花を友にして
たよりなげにぞ日を暮らし
長い睫毛の濡れとほす。

きりぎりす

夜ごとに深む
秋ゆゑに
霧は侘しく
ながれゆき
星は淋しく

またたくが
かこつな啼くな
きりぎりす。

ふるえてやまぬ
しろがねの
ひびきは胸の

殿堂の
扉をくだく
愁はしさ
かこつな啼くな
きりぎりす。

悲しみの雨

悲しみの雨が降る
うす白くけぶる
ほのかな愁ひは
さびしい街に漲る。

この夕ぐれ
どこかの家の
くらい片隅で
秋の少女がしよんぼりと
灯を捧げて祈つてゐやう。

少女の白い頰を

はふり落つる涙は
灯をも消すべき
悲しみの雨か。

悲しみの雨が降る
うす白くけぶる
ほのかな愁ひは

さびしい街に漲る。

獵人

いとほしき人の
赤きぱらそる
いとほしき人の
うす白き手
いとほしき人の

すゞしきうた——

友よ　君よ
われは狩人
いとほしき君が
心を捕へんとすれど
たゞむなしく

幻を撃つ。

カナリヤ

ころも縫ふ
白き手の
ふとも動かず
夕まぐれ。

寂しき影の
掠めしや
をとめ心に
雲のごと。
いなあらず。

軒の片蔭カナリヤの
たゆげに唄ふ
秋のうた。

そのひとふしに
さそはれて
只かりそめの

もの思ひ。

ほほゑみ

いまはなき君
なつかしき君
ふと浮び出づる
そがほほゑみ——

乳壺に乳みつるごと
しんしんと胸をうつ
まさびしきそがほほゑみ
いまはなき君のほほゑみ

かりそめに思ひ出で
ながれき淋しき涙は。

落日

春の落日あかし
君がよこがほ
草青き丘のうへ。

ふと赤き詩集を閉ぢ

君は遠き空に
ぢつと見入る

春の落日あかし
君のつれなさ
などてわれを見ざる？

花の散る日

花の散る日に
おもふこと——

「よろこびに
つながるよりも

かなしみに
つながる時に
しみ〴〵と
君のこゝろの
しのばるゝ。」

お花畠

葱坊主

てのひらに
白い坊主をのせて
思ひ悲しむ
夕まぐれ、

淋しい小坊主
啞の坊さん
白い小坊主
くり〳〵坊さん。

眼はいたし
涙はあつし

白い小坊主
葱の小坊主。

異人さん

「もうしニホンのムスメさん
お早うありがとさようなら。」
柳の芽ぐむ居留地の
忘れかねたる異人さん。

流れ星

あどけない幻想から
ふと私は眠つてゐる妹の
小さい拳をあけてみた。

もしや握つてはゐないかと

ぢつと瞳を凝らして
私はのぞき込んだ。

そのわけを御存じ？
だつて青い星が一つ
ぽつんと寂しく流れて
どこともなく

消えたんですもの。

ものゝ影

くろぬりの
ピアノの蓋を
とざすとき
ふと浮ぶものゝ影

ぬひとりの
薔薇さす針を
止めるとき
ふと思ひづるものゝ影

ものゝ影……
いとも怪しくしのびかに

心にまつはるもの〻影
長く心を亂せしを……

ふと思ひ出て袖裏に
ほてる頰をばかくしにき
もの〻影……
そはいつの日かお戸棚に

しまひ忘れしチョコレート
銀の衣着るチョコレート。

寶玉

赤いルビイには
世界がまつかに見えた。
青いサフアイヤには
世界がまつさをに見えた。
いづれもおびえ悲しんだ。

けれど——
金の指環にはめられて
少女の指に住んだとき
世界は樂しく
華やかだつた。

白い鳩

白壁の白い小鳩の落書は
つばさがあれど飛べやせぬ。
「指きり鎌きりとれつきり
蛙が啼くからかへろ――」
たそがれ時を子供等は

歸る足さへはやけれど
鳩はだまつてぢつとして
飛ばうともせぬいぢらしさ。
鳩よ今夜は寒からう。

舞踏靴

誰が忘れた心やら
廣間の隅の舞踏靴
春のあかりにちら〳〵と
光るとめがねなつかしや。

悲しみ

悲しみを
そつと吸ひとる海綿が
見つかるものなら探しませう。
探した揚句見つかれば
そこはかとなき悲しみを

みんな吸はせて捨てませう。

こつた歳

いくつになつてと訊いたらば
紅さし指をそと噛んで
袂のはしをつまぐつて
それから眉をくもらした
歳と一しよに淋しさを

とつた君とは知らなんだ。
なぐさめかねて私は
默つて薔薇を手渡した。

友を思ふて

しげ〳〵と
君を思ふてある故か
あたしの心にほそ〳〵と
小徑がついた冬の夜。

梅の蕾

一つき二つき
三つめの羽子が
五つの白い羽根ひら〳〵と
梅の小枝にとうまつた。
とまつた羽根は梅の花

かたい蕾が今咲いた
清く明るく今咲いた
たそがれ時の白い花。

歌時計

春のひとひの物おもひ
靜かに歩む年月を
ふり返りみて胸かろし——

かの日の嘆きも憎しみも

さては憂ひも悲しみも
水のごとくに消え去りて——

時計が歌ふちよんきなと
あはせて首ふる氣輕さに
春のひとひが暮れかゝる——

抜け毛

落ちた抜け毛を指に巻き
きりつと結んでまた解いて
溜息ついて眼を伏せて
それから髪を結ひました。

とんころりん

とん　とん　ころりん
とん　ころりん
夕ぐれ時のあの音は
君の小琴か風鈴か

とん　とん　ころりん
とん　ころりん
夕ぐれ時のあの音に
醉うて浮んだ夏の月。

魔術者

海です。靜かな海です。
ぢつと足をつけて
ひやゝかな水の感觸に
甘えていらつしやい。
そうら、あなたの唇に

しぜんと歌が出ます。
その歌は赤い珊瑚を
すく〳〵と育てます。
また月を戀ふる人魚に
よろこびを與へます。
ね、ほら、海は魔術者でせう。

春

芽ぐむ柳についひかされて
飛んで來るぞえつばくろは
ひかる簪についひかされて
散つて來るぞえはなびらは。

夜霧

夜霧の中で
溜息ついて
とろりと光る春の月。
たつたひとりで
とぼ〳〵と

空を行くのに倦きたのか。
それではあたしも
眠らずに
起きて唄つてあげませう。

春の手品

さら〳〵と
足の運びにからむ
袴のすその肌ざわり。
こころを輕くつゝむ
雪駄の下のしろい埃。

さては
パラソルの青を透かす
やはらかな光線の縞——
みんな春の香はしい手品。

だからつい昨日も

この手品にかゝつた私
とろりと夢を見るやうな
明るい氣持になつて
二度までも道を違へたの。

啞の小鳥

涙の谷を分け行けば
さびしく立てる十字架に
啞の小鳥がしよんぼりと
翼ぬらしてとまつてた。

赤い林檎

白い西洋皿のうへに
たつた一つ載つてゐる林檎。
肌はつや〳〵と赤く
こぼれる匂のほの甘さ
かなしみのしるしか

よろこびのしるしか
あたしには解らない。
たゞあたしはかう呟く。
「きよい少女の心臓を
眼あたり見るやうだ」

初夏

初夏は……
パラソルの黒檀
その爽やかな手ざわり。
初夏は……
つやゝかな白絹の靴下

きりつと穿いた足ざわり。
初夏は……
麻のハンケチに刺繍る
頭文字のみどり。
かくて初夏の思ひは
少女の胸に青く生く。

秋の夕

鐘が鳴りました。
月が出ました。
薄紫の思ひ出の國を
ひそかに訪ねませう。
小鳩を搔い抱くやうに

淋しさの胸を抑へて。

心

雷燈に青い布をかけ
まぶたに青い夢をかけ
ひとりピアノをひくならば
せめて笑ふかこのこゝろ。

眼と手と胸

淋しさは
秋の日ざしのきらきらかさ
さん〳〵散る金粉は
眼に落つ
手に落つ

胸に落つ

憂はしく

遠き思ひのはろ〳〵と

昔の夢の戀しさを

眼に見る

手に見る

胸に見る

秋なれば

日ざしを浴びてぽつねんと

たゞうつむいてつく息は

眼に泌む

手に泌む

胸に泌む

覗き眼鏡

三つの心

「月の光を浴びると
狂ほしいほど心がざわめくの」
姉はかう云つて
水の中に手を入れた。

しらゝと月の光を碎いて
はてもなく流れる水の淋しさ。
姉はこの淋しい水の心を
手のさきから感じた。

「月の光を浴びると
心の底から嬉しさがこみあげるの」

妹はかう云つて
思ひ切り聲高に唄つた。

唄聲は春の夜のおぼろの中に
ふるへながら消えて行つた。
けれど聞き惚れてゐる妹の耳は
春の夜の嬉しさで赤く染つた。

兄はこの二人の妹を
默つて見つめてゐた。
「淋しい時には淋しがるがよい
嬉しい時には嬉しがるがよい」

兄は心の中でさう思つて

巧みに櫂をあやつつてゐた。
舟は辷る、輕やかに辷る
三つの心を載せて、はてもなく辷る。

思ひ出の絲

今日はほんとにいゝ天氣です。
この青空を見てゐますと
心の中までも澄んで來て
ちつとも影がさゝないくらゐ
あたしはこんな時

思ひ出の絲をつなぎ合すのが
たまらなく好きなんです。

思ひ出の絲の中には
赤いのも、青いのも
また黄いのもあります。
折々白いのや黑いのもあります。

これをつなぎ合しながら
ぬく〳〵と日を浴びてゐると
ほんとに幸福なんです。

赤い思ひ出はお正月
六つの時にはじめて着た
赤いジヤケツです。

「まるで西洋人そつくりね」
かう云つて
驚いたお隣の
小母さんの聲までが
はつきり浮んでまゐります。

青い思ひ出はカルタ會。

八疊のお部屋の電燈の笠は
青ガラスの唐草模様。
「あら、違つてよ」
「いゝえ、こつちよ」
まるでむべ山風のやうな騒ぎ
その上から照らす青い光。

黄い思ひ出は伊豆からのお年玉。
荒縄でしばつた箱を開けると
つやゝかな肌の蜜柑が
肩つき合せて入つてゐました。
「あらきれいね」と私は握つて
「あたしのダイヤモンド」と云つて
家ぢゆうを飛び歩きました。

白い思ひ出はお部屋のカアテン。
冬の間はふさぎ勝の人のやうに
だらりといつも垂れてゐました。
カアテンを揚げて、窓を開いて
こそばゆいほどの草の匂を
早く嗅ぎたいと思つたあたし

其の頃の氣持の白かつたこと！

黑い思ひ出は二月の夜。
月のない暗闇にたつた一人で
あてもなく歩いた記憶
それも夢の記憶ですの。
大きな溝へ落ちて

「あらこはい」と云ひながら
手を握つたまゝ眼を覺しました。

あゝかず〳〵の思ひ出。
今は十七の春に遭つて
頭髪もいつか二尺にあまり
肩揚げもやがておろす身

けれど思ひ出の絲をつなげば
身も心も幼い昔に歸り
日光までが微笑みかゝる。

心のコップ

△ある三月の日に
みよ子の唄へる△

一

私は自分の心が、水晶づくりのコップのやうに、きもちよくすきとほり、明るい光を湛へてゐるのを感じます。

それは三月の晴やかな朝。素晴しく上手な雀の前奏曲。ちりんちゆ、ちりんちゆと囀る聲。その聲を聞きながら、そつとお寝掛の窓掛に忍び寄る、あのあどけない朝風に自分の頭髪をなぶらせてゐる時、私の眼からは、まだ睡眠が飛び去らないので、私はまるで夢の中にゐるやうな氣

がします。うつとりした、靜かな幸福！

二

私は自分の心が、瑪瑙づくりのコップのやうに、つやゝかに美しく、晴ればれしてゐるのを感じます。

それは三月のひそやかな晝。すく〳〵頭

を擡げた花の若芽。輝く日光を浴びて、根元に落す紫の影。ちんまりと心地よくお揃ひに並んだその若芽を見つめながら、花園の細道をゆつたり歩いてゐる時。

私はしみ〳〵土の匂を嗅ぎながら、まるで自分までが若芽になつたやうな氣がし

はじめます。ちつとも心配がなく、生長

の喜びに浸る幸福！

三

私は自分の心が、黄金づくりのコップのやうに、きら〳〵と華やかに、それでゐてしつとり落ついて光るのを感じます。

それは三月のしんみりした夕、星は薄絹

のやうな空に瞬き、高價な刺繍の飛模様。ひそ〳〵と私の肌に迫るうすら冷たい夜氣。ぢつと机に手をついてあてどなく物思ふ時。

私はうつとり幻を描き、その幻を追かけたりします。それは過去や未來の樂しい幻。するとひとりでに、私の顏に微笑が

昇るのです。まあその幸福！

四

けれど、けれど、そんなに樂しい一日が暮れて、さびしい夜が來ると、私の心のコップの中に、何も入つてゐないのが苦しくなります。あゝ、空虛のコップ！空

虛のコップ！私はどうかして、この美しい心のコップに、何ものかを充たしたくなります。その時に私は、たつた一つのものを見出します。それは讀書に耽ることです。

書物の中に書かれた、種々な人たちの心にひきつけれて、私は殘り惜しい思ひを

しながら、さよならと云ひます。そして
心のコップを抱へて、靜かな睡眠に入る
のです。まあその幸福！

私は知らない

私は知らない。
悲しみが消えて行くやうに、ほのぐと
東の白むわけも、金の車に乘つた王子の
やうに太陽が山の上に出て來るわけも。
私は知らない。

太陽が出たと思ふ間もなく、私の足元に黒い影が落ちるわけも、またその影が私の動くとほりに動くわけも。

私は知らない。

あゝも美しい太陽が金粉のやうな光を降り注いで、凡てを鍍金するのに、何だつてまた私の足元にこんな汚い影を落すんだらう。おまけに私の動くとほりに動く意地わる！ほんとに私は知らない。

私は知らない。

蜜蜂が盗人のやうに、花の戸を押し開いて默つて甘い蜜を盗むわけも、盗まれてもやつぱり花が嬉しさうに笑つてゐるわ

けも。

私は知らない。

赤、紫、白、黄、とり〳〵の花が、蜜蜂を困らすくらゐ、數多く咲くわけも、春、夏、秋、冬、一年中いろ〳〵な花が咲くわけも。

私は知らない。

針を持つた危險な虫が、あの美しい花の蜜を吸ふことが出來るのに、何だつてまた私みたいな、おとなしい少女が、自由に吸ふことが出來ないのだらう。おまけに蜜の袋は、ごく小さいのだもの！

ほんとに私は知らない。

私は知らない。

そばかすのやうに汚い小砂利が、道いつぱいにあるわけも、雀のお饒舌が、靜かな空氣をゆすぶるわけも。

私は知らない。

詩人のやうにすつきりした鶴が、雀のやうにそこらに澤山ゐないわけも、小砂利

のかはりに、美しい寶石が落ちてゐないわけも

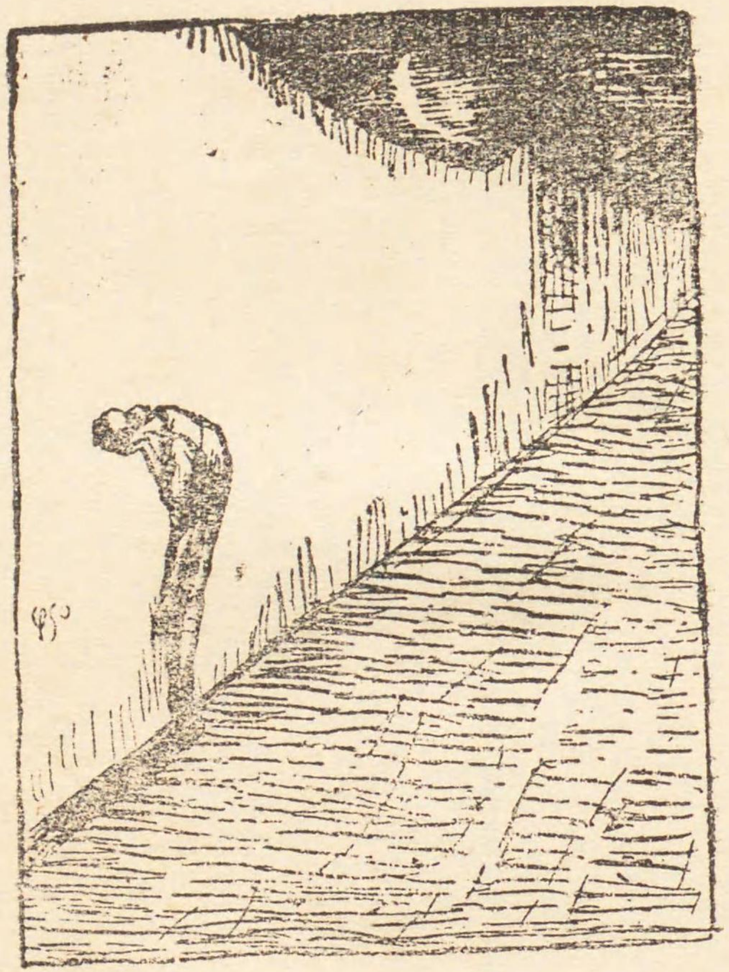
私は知らない。

この世を造つた方は、何故美しいものばかりを、澤山お造りにならなかつたんだらう。美しいものは誰の眼にも、こゝろよい氣持を起させるものだのに、おまけ

に私たちは美しいものが好きだのに！
ほんとに私は知らない。

私は知らない。
私達にマシマロウのやうな、白いむつちりした手のあるわけも、黑曜石の光も及ばないほど、黑いこの頭髮があるわけも、

私は知らない。
歳をとると、日數のたつた茄子のやうな、汚い手になるわけも、線香の灰のやうな、醜い頭髮になるわけも。
私は知らない。
何故いつまでも、少女でゐられないのだらう。この清い胸の中に、何故悲しみを



忍び込ませるのだらう。何も知らずにただ安らかに、このまゝ生きてゐることは、何故出來ないのだらう。

ほんとに私は知らない。